

食育歳時記

11月

社会福祉法人上名福祉会
認定こども園
つるみね保育園
園長：杉本 正和

「あたしんちの畑」で泣き笑い！

食育で子どもの主体性を育む

7月、記録的な大雨が続きました。おそらく、「鹿屋（かのや）」という地名をニュースで目にされた方も多かったのではないかでしょうか。幸いにも施設への影響はありませんでしたが、驚異的な雨量には恐怖を感じるほどでした。

さらに8月、全国各地で記録的な猛暑となり、感染症の不安からマスクが手放せない中、熱中症にも最大限の対策が必要な日々が続きました。

そして9月、猛烈な勢力の台風10号が九州を直撃し、多くの人が避難生活を強いられ、これまでにない不安な日々を過ごしました。

このように、自然の猛威は、年々厳しさを増しています。農業従事者の家庭も多い私たちの地域では、この自然とどのようにかかわっていくかは、大きな課題です。

様々なドラマを展開している「あたしんちの畑」という、ごく限られたスペースの中でも、自然との戦いが続けます。そして、子どもたちが主体的に取り組んでいるからこそ、思いがけない成果に笑顔あり涙ありの場面がくり返されています。これらの体験を通して、「農作物を育てるのは簡単ではない」ということが、子どもたちの心にも刻まれていると感じます。

収穫になるとやって来るカラスやタヌ

キとの知恵比べ、一晩ですべての葉を食い荒らす青虫、カヘムシの大群、長雨や大きな台風との戦いなどなど。そして、それらの困難を乗り越えて収穫できた時の笑顔。それは、イベント的に収穫だけを楽しんでいた時とは、明らかに違う奥深い表情です。

収穫時期の泣き笑い

「あたしんちの畑」では、季節ごとに、日々様々な「泣き笑い」がくり返されています。

トウモロコシは、収穫時期を迎えるとカラスの餌になってしまったり、なかなか受粉がうまくいかず、まばらにしか実が付かなかったりをくり返していました。しかし、なんと今年初めて、出荷できるぐらい



苦心して育てたトウモロコシを親子で収穫

立派なものを収穫できる家族がありました。家に持ち帰って、おいしく食べた時の写真を使って、自信満々にプレゼンテーションもしてくれました。

しかし、思ったように成長せず、持ち帰ることができなかったトウモロコシを見て、さびしい表情を見せる子どもたちもいました。それでも、次はどんな作物に挑戦するかを家族と一緒に考え、工夫して世話ををする姿が見られました。このように、失敗を活かして何回でも試行できるのが、「あたしんちの畑」の最大の利点です。

イチゴが育っていく畠の様子は、低年齢児からも注目の的でした。注目されることによって、畠のオーナーとしての年長児は、モチベーションが高まります。管理や世話を楽しみながら続けたことで、みごとに大きなイチゴが収穫でき、口にした時の表情は、自信に満ちていました。

コミュニケーションを広げる場

おすそわけを楽しめるのも、自分の畠の特権です。その場で収穫して畠で食べるミニトマトの味は格別です。あげるほうも、



来園者におすそわけ

もううほうも、笑顔があふれます。

同じ年齢の友だちだけでなく、異年齢の子どもたち、保護者同士など、この限られた小さな土地から、様々なコミュニケーションが自然発生的に広がっていきます。さらには、観察に来園された方に、自分の畠で育ったミニトマトを持って行った男児の姿に、皆さんの感動の声が響いたこともありました。

このように、「あたしんちの畑」が子どもたちに与える影響をもたらしていることを認識する場面が、日々、展開されています。大人が企画する食育だけでなく、子どもたちが日常的に主体的にかかわる食育をしてみたいという園では、年長児の子どもたち一人ひとりに、小さな畠を配分してみてはいかがでしょうか。子どもたちが自分のペースでいろいろな作物を育て、収穫に向けて楽しむ姿は、きっと、新しい保育観を気付かせてくれるはずです。



野菜づくりを主体的に取り組む子どもたち